高校放送コンテスト講評　　　　　　　　　　関口泰雅

アナウンス部門

ステージ上で声を出す機会はそう多くはないでしょうから、緊張したと思いますが、その中でしっかり発声できていたことは自信を持ってください。「一語一語を明瞭に」「正しいアクセントで」という基本は、みなさん出来ていました。

その上で、アナウンスで大事なのは「読む」ではなく「伝える」ということです。

「意識が前に向いているか」というところは大きなポイントです。原稿にばかり意識が向いて、「読む」ことに集中しすぎていないか。ぜひ、日ごろから「誰に伝えているか」を意識しながら練習してみてください。４～５ｍ先にいる相手を想像して声を出してみましょう。少し高い出だしになるはずです。適正な声の高さを身に付ける上でも、４～５ｍ先の相手に伝えようとする意識は、とても大事です。

そして、「伝える」意識を持つことで、間や緩急がうまれます。伝えたいと思った時、間をおいたり、ゆっくり伝えたりするものです。例えば、「電話番号教えて？」と尋ねられた際、相手にわかってもらおうと思ったら、すらすらっとは言わないですよね。相手から「えっ？もう一回言って」と言われてしまいます。一回で理解してもらおうと思ったら、一つ一つの数字をゆっくり言ってあげるのではないでしょうか。

文章の意味を理解し、大事なところはどこかを意識し、その部分は、ゆっくりにしたり、間を入れたりして立てる。そうすると、一つ一つの文章が、単調にならず、大事な言葉が耳に残り、伝わりやすいアナウンスにつながります。

私たちは「普段の会話」では無意識にそれが出来ているのですが、「読み」になると文字を追うことに意識がいき、出来なくなるものです。「棒読み」と「会話」の違いです。「いかに会話に近づけるか」を考え、どの言葉が大事なのか、どの言葉を耳に残したいかを、しっかりと意識してみるようにして下さい。

朗読部門

朗読は、会話部分と地の文で変化をつけなければならなかったり、会話の中でも複数の登

場人物を使い分けなくてはいけなかったり、とても難しかったと思います。その中で、ス

ピードの変化や、声の高低で表現する生徒もいて、とても感心させられました。

朗読も、聴く相手を意識することは、アナウンスと同じです。特に大事なのは「相手に情景をイメージさせる」こと。朗読を聴く人は、景色、登場人物の表情、状況などを想像しながら楽しんでいます。相手にイメージしてもらうために、大事な要素が“間”です。聴く人がイメージ出来る前に、すらすらっと次の展開にいってしまうと、話についていけなくなってしまいます。ですから、「ここはイメージを膨らませて欲しいと思う場面」「状況を想像させたい場面」は、少し“間”をつくって、「相手がイメージしたかな？」と思いをめぐらしながら、話を読み進めていって下さい。

そして何より、相手にイメージしてもらうためには、自分が情景をイメージ出来てないといけません。自分の頭の中に、その場面の絵がかけているかどうか。登場人物の年齢、顔、背格好をイメージし、一つ一つの場面の情景が頭の中で出来上がってから声に出しましょう。自分で実際に絵を描いてみるのも良いでしょう。

もうひとつ意識すると良いのが「イメージに合った言葉の緩急」です。人は会話の中では、言葉の意味で自然と緩急をつけています。例えば、「急に強い雨が降ってきた」「突然走り出した」などの「急に」「突然」、「ゆっくりうなづいた」「だんだんと色が落ちていった」などの「ゆっくり」「だんだんと」。「急に」「突然」は早く、「ゆっくり」「だんだんと」はゆっくりと。言葉のイメージに合いませんか？　ただ「文字」を音声化するのではなく、「意味」を音声化する。声に出す前に、言葉の持つ意味やイメージを考えてみましょう。